

「閏」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

ものの芽の先に小さき種の殻 山田 雅子

蒔いた種が芽を出したのだが、種の殻が覆いかぶさった状態で発芽したものと思われる。種蒔きのあとは手のひらで確りと地面を叩いておかないと、このように殻を付けたまま発芽する。でも何だか不思議な光景で作者も「アレ？」と思ったに違いない。「アレ？」と思う人は俳句の将来が明るい。よく観察した一句。

日焼け避け月光仮面のいでたちで 横須賀智子

どこの誰かは知らないけれど誰もがみんな知っている。ご存知「月光仮面」。そのいでたちは、記録によると白いターバンと覆面の上に黒いサングラスと白マフラー、白の全身タイツに黒いベルトを着け、裏地に色のついた白マントを纏い、手袋とブーツを着けていた。この句では、月光仮面そっくりではないが似たような衣装を纏って、日焼け防止している自分を描く。暑くはないか？

ああ上野さくら吹雪に踏み迷ひ 東 祥子

コロナ以前の上野公園でのお花見は、鳴り物入りで決

して行儀は良くなかったが、それを目当てに人が集いもした。作者の「ああ上野」の感嘆は上野での花見を経験した者にはよく解る。「踏み迷ひ」に欲びが凝縮されているよう。「ああ上野」―上野駅の広小路口前にかつての集団就職を唄った『あゝ上野駅』の歌碑が立っている。

天駆けるオーロラの帯万愚節 阿部 草薫

エイプリルフル、四月馬鹿、万愚節。ちよつと驚くくらいのささやかな嘘が許される日である。万愚節の句というは大抵、愚かな場面や事柄を取り合わせるのが常で、これは或る意味、理に落ちる危険性を孕む。掲出句では、逆に万愚節から全く遠いものを取り合わせていて新鮮だ。「天駆けるオーロラの帯」がまるで万愚節を祝福し、包み込むかのような美しい光を放つ。

子をひよいと片手に母や雲の峰 伊澤やすゑ

この母は雲の峰のようにどっしりとしていて頼もしい。「ひよいと」吾子を軽々と抱えるその片手、片腕はきつと逞しく福々しいに違いない。母子の笑顔がそこから見えてくる。「雲の峰」がよく効果を上げている。

Kポップ歌ふ子が来る五月来る 石垣喜代子

韓国のアイドルグループたちが歌うKポップ。恋歌中

心でリズムミカル。そのKポップを歌う子が作者の許へ来たという。思春期の子なのだろうか。この句では「来る」を二回用い小気味よい。誰もが活動的になる五月がKポップと共に訪れたのである。勢いのある句。

好日と小さき落款山笑ふ 市村 啓子

趣味の広い作者は自分で落款も彫る。「好日」の二文字がいたく気に入っているようだ。好日は晴れて気持ちのよい平穏な日。故事の「日は好日」は一日一日を大切に生きる心構えをいうらしい。前向きに生きようという気持が伝わってくる句で、春の山がこの作者を温かく見守っている。

五月富士関東平野立ち上る 岩根 甲

〈死に近き夜明けを眺む雨水かな〉に並び、この句と〈梅雨明けが一気に銀座四丁目〉が明るく置かれている。金子兜太の代表句の一つ〈暗黒や関東平野に火事一つ〉に見える世の暗闇や人々の暮しとは真逆に、この句は雪解け後の五月富士を雄大に描く。関東平野からにゅーつと富士が立ち上がるのだ。それは日本列島の成り立ちを立体的に見ているようで面白い。岩根さんの本領が発揮された佳句。

テニス決勝香水つよき好敵手 牛込はる子

「香水つよき」と感じた時から作者の敗けはもう決まったも同然。失礼ながらそう思ってもよきそうな一句である。香水をつけて最初の十分から三十分は香りが強いというが、この「香水つよき」には何があっても勝つという好敵手の気合が感じられる。作者も次回からは手首や首筋、肘全体に香水を強くプッシュせねばなるまい。

若楓透かす日差しの石畳 内海 範子

楓の若葉が風に揺れて清々しい。その若葉に差し込む日の光は若葉を透かすように石畳へ落ち、これも趣があり心に沁みる。若葉の季節ならではの、光と影の柔らかさが美しく感じられる一句である。

疫病禍戦禍のある世時の日よ 大下 壽櫻

時の記念日は六月十日。天智天皇の頃宮中に漏刻（水時計）が置かれ鼓や鐘を打って時を知らせた、それを記念する日で、今は時の大切さを宣伝する。疫病も戦も有史以前太古の時代から絶えることがない。時というものがある限り続いていくのだろうか。でもそれを運命と思いたくはない。時の日にこそ「戦争している場合かよ」と訴えたくなる。作者の気持はそこにあるのではないかと、この句から思った。

囀りや足裏より吸ふ大地の氣 太田 裕子

大地から何かしらの気配を感じるのは生き物の証。現代人が失ったといわれる靈力を作者は辛うじて保持して、足の裏から大地の氣を吸う。耳からは鳥の囀りを感じ、全身に天地のパワーが宿った。何事にも鈍感な私には羨ましい限り。生きる力が漲り、何よりである。

大緑蔭子等の声する方へ行く 小河原政子

子どもたちの声に惹かれた作者。大緑蔭なので子どももかなり沢山いたのだろうし、その声も緑蔭の中で反響し合い大きく聞こえたに違いない。自ずから足はそちらへ向く。勿論、笑みを湛え大緑蔭に入ったことだろう。

湧きあがる大地の声よ里は春 小野 直美

湧きあがる大地の声。この作者も春という季節の到来を全身から感受している。土の声、根の声、芽の声、地虫の声など、生きとし生けるもの見えない声が作者の体内に湧きあがったのだ。待ちかねた春が里に来た。

歳時記の師の句に葉清和かな 金子かほる

先師の鍵和田柚子先生の句であろう。いろいろの俳句歳時記に例句としてたくさん採られている。その句が置かれている頁に葉を挿し入れ、師を偲ぶ。清和は初夏の

季語で、氣候が清らかで美しい五月ごろの季節をいう。作者の心に適ったのは、どの句だったのだろうか。

權練りに祭太鼓や瀬戸の海 金田 知子

權練りは愛媛県松山市北条の鹿島神社で行われる祭礼伝承行事。その起源は千年以上も昔、河野水軍の頃から続いているといわれ、水軍の出陣に際して神前に戦勝を祈願したという。古式に則り、船の舳先の男二人が權を持ち、樽の上で踊る。現在は五月三日に実施されている。穏やかな瀬戸内の海に太鼓が鳴り響く。

草笛の微かに聞こゆ懐古園 金田 喜子

小諸の懐古園へ行くと、園内の島崎藤村記念館の前あたりで誰もが草笛の音を耳にする。私の記憶違いかも知れないが、それは本物の草笛ではなく、センサーにより草笛が流れる。それも決まって「ふるさと」の曲。いや、そうではなく草笛の愛好者がいつもしらっしやって草笛を吹いて下さったのかも知れぬ。この句の作者もこの草笛を懐かしく聴いている。青葉の美しい季節である。

夏草や釣り上げられし魚躍る 菊地 孝枝

今釣り上げられたばかりの魚を詠む。岸から釣っているのだろう、夏草がその背後に茂っている。この句はな

んといつても「魚躍る」がいい。このびちびちした躍動感が釣竿を伝わり、中空を漂い、作者の目に映る。「俳句は今を詠む」の典型的な句で、とても鮮やか。

背伸びして覗く鯨桶端午の日 北 好夫

空ラの鯨桶でなく、鯨がたくさん詰まった出前の鯨桶。端午を祝つての家族の会食。どんな鯨が桶に入っているのかなと、誰かさんが覗いた。「背伸びして」だから子どもか、いや、大人でも心もち伸びしてチラ見することがある。トロ、サーモン、トロサーモン、海老、イクラ、帆立、玉子、烏賊、ハマチ等々。先ず子どもに好きなものを食べさせてから大人が残りの鯨を分け合つて戴く。後味の良い端午の日だったようだ。生活感のある句。

蜘蛛の糸揺れば木々も揺れそむる 木山 有衣

蜘蛛を観察し、蜘蛛の糸の動きまできちんと察知している。糸は風でも揺れるし獲物が掛かった時にも当然のことながら揺れる。その揺れが蜘蛛のみならず、枝にも伝わり、幹にも伝わつて揺れる。この句、「木々も揺れそむる」に動物・植物間の命の循環性と一体感が窺える。そこまでも写真した作者の詩心に感心した。

十葉や兵士の墓標一望す 久保田勝一

十葉の花がぞくぞくと咲いている様は、均一に立てられている墓標群に似ている。第一次世界大戦をブラックユーモア的に皮肉つた反戦映画『素晴らしき戦争』（一九六九年・英国）にも、戦死した兵士たちの十字の墓標が異様に映つていた。この句の「一望す」は何気ない言葉ではあるが、重い。

早乙女の化粧や泥のひとしづく 栗原 季星

田植をしている早乙女の顔に田の泥が撥ねたのだ。一滴ではあるが、それは紛うことなく「泥」。折角の美しい顔が台無しである。でも、田植はずつと昔から続いてきたわけで、農業で命を繋いできた農民にとつてこの泥の「ひとしづく」はもはや勲章。などと、田植も稲刈も経験したことのない私が言つても全く重みがない。説得力がない。作者は農業のこともよくご存知の人。

ゆるやかに下つてみたし天の川 小坏あゆみ

下つてみたいといつても銀河という宇宙空間である。でも、そこは創作の世界。作者は天上へと吸われ、天空を横切る天の川に身を委ねる。天の川の句には、以前にも紹介した加藤楸邨の〈天の川わたるお多福豆一列〉もある。いつときの夢ながら、ロマンがあつていいではないか。秋を迎え、作者の心はいよいよ澄んでくるのだ。

咲き切りし薔薇の凋落見詰めをり 小泉まり子

中村草田男の（咲き切つて薔薇の容を超えけるも）は、ついに薔薇はそのすがたを超えて薔薇の本質だけになったという、途方もない把握から生まれた句であつた。

一方、掲出の句は、咲き切つた薔薇を「凋落」と把握した上で、その容色の衰えた薔薇から、自己の現在の命の有りようを確認している。作者らしい作り方だと思ふ。

袖子忌や空と溶け合ふ水平線 幸喜美恵子

鍵和田袖子先生追悼の一句。六月十一日が命日。もう三年になる。掲出句は「たつた一度の人生、何の遠慮もいらない、思い切つて句を作りなさい」と励まし勇氣づけてくださったその先生を偲ぶ。「空と溶け合ふ水平線」の措辞には、祈りに近いものがあるだろう。先生は今、空と水平線が一体となつた遙か彼方にいらつしやる。叱咤激励のあの華やいだ声が聞こえて来るようである。

ねぢ花や吾子らスカートくるくと 小濱けえ子

振り花。文字摺草。小さな花が螺旋状にくるくる昇りつめ可憐に咲く。花は、大きなもの小さなもの、様々な形のものもあり一律ではない。そのことに我々はほつとする。自然界の一員である我々人類も多様でありたいからだ。なので「え？これも花？」と思える振花に出合う

と嬉しくなる。この句の「吾子らスカートくるくと」にもその遊びが窺える。

どくだみを腐しとはそは何てこと 小林ゆきお

どくだみの語源は「毒溜め」という。漢方ではお馴染みの草。十の薬効があるので「十薬」と名付けられたとか。それは兎も角、このどくだみはとても臭い。掲出の句の「腐し」（くたし）は物を腐らせるという意味で、どくだみの臭さを悪者に行っている言葉。作者は「そは何てこと」と、漢方薬の成分にもなっているどくだみに何てことを言ってくれるんだと、どくだみの肩を持つ。「そは何てこと」の時代がかつた物言いが作者らしく面白い。

もてなしの鮑も食はで夜を語る 小林 玲

友人。知人。心を通わせている人と久し振りに会つて一緒に会食。先方のもてなし料理のメニューには鮑などもあり、それらを見ながら、食べるのも忘れるほど語り合つたという。楽しい一夜だつたに違いない。で、結局その鮑はどうなつたのかと、読者は気になるけれども、話の弾んだ後に美味しく戴いたのだろうと下世話な私は思ふ。そう想像させてくれた鮑の贅沢な一句。

豆ごはん二階の夫を呼びにけり 斉藤久美子

この句から草間時彦の（土用鰻息子を呼んで食はせけり）を思い出した。「どうだ、美味しいだろう？」と言いたいところを我慢し、息子の健啖ぶりをただ見ている。そういう親心が垣間見える一句だ。掲出の豆ごはんの句では夫への愛情が見え隠れしている。鰻より質素な豆ごはんだが、夫の好物なのだろう。豆の匂いが漂えば呼ばなくても二階から降りて来るものを、優しい作者は「豆ごはんよ」と呼ぶのだ。ご馳走様。

楠青葉磴 百段の風を踏む 島 昌子

気持ちの良い句である。青葉繁れる中、石段を上るのだが石段を踏むといわないで「風を踏む」と作者は表現した。なかなか言えない言葉である。青葉の風を心地よく踏み、人生はまだまだ上り坂。羨ましい限り。

浮いて来いカンカラ三線聞ぎに来い 嶋谷 宗泰

「浮いて来い」は浮人形のこと。子どもが入浴の時にブリキの金魚や舟、人形などを湯に浮かせて翔う遊びである。俳句ではこの「浮いて来い」から想像を働かせ、浮人形に限らない様々なものを浮かばせている。例えば〈長子次子稚^{わか}くて逝^{わか}けり浮いて来い 能村登四郎〉（丹田に力を入れて浮いて来い 飯島晴子）（俳諧は屁のやうなもの浮いてこい 中原道夫）など。翻って、掲出の句

は「カンカラ三線聞ぎに来い」と呼び掛けている。カンカラ三線（三絃）は、敗戦後の沖繩で米軍の空缶やパラシュートの紐などの廃材を利用して作り出された。作家の故藤本義一氏はこのカンカラ三線を発明した「不屈の精神こそが沖繩の魂であり、サンシンの神髄である」と書いている。この句の「浮いて来い」と「聞ぎに来い」は沖繩戦での多くの犠牲者、そして戦後「アメリカ世」に変った沖繩を生きてきた逞しきウチナンチュへの、心からの呼び掛けであるのだろう。

蚊をうちて思はず浮かぶ一茶の句 清水 悠太

一茶の（やれ打つな蠅が手をすり足をする）。清水さんは蚊を打つた時にこの句が咄嗟に脳裡を掠めたという。打つたのが蠅でなく蚊であつても、打つた己を「やれ打つな」と諫め、一茶の名を入れた掲出句を尊敬する一茶に捧げた作者。一茶も喜んでのことだろう。

花は葉に故郷小さくなりにけり 首藤 久枝

幼少期を過ごした故郷を久しぶりに尋ねての感慨。桜の花は疾うに散り、今は青葉が瑞々しい。故郷そのものが小さくなったわけでもなからうに、作者にはこの故郷が小さくなったように感じた。あれから相当の時間が経った故郷。住む人が減つたり空家が増えたり、故郷の活気

というものが少し衰えてきたとも感じたのだろうか。私事だが、小学校を何十年も経つてから尋ねたことがあり、その校庭を見た時に、なんて狭いのだろうと思つた。在学中はボールの遠投を競つたりした校庭。ずつと広いイメージでいたけれども、大人になつて佇むと昔の面影は確り消えていた。故郷も然り。歳月は残酷である。

猫抱いて卯の花腐し倦もせず 正田 和子

「卯の花腐し」は卯の花も腐らせるような雨。梅雨の走りの雨である。同じ類に「茅花流し」があるが「卯の花腐し」の方が字面からして鬱陶しく感じる。作者はその鬱陶しさを一句に仕立てた。ひたすら愛猫を抱き鬱陶しさに耐えているのである。雨音が：聞こえてくる。

暗雲と光るさざなみ代田かな 新海あぐり

代田に美しい山河が映るといふ句は万とあるが、暗雲が映っているといふ句はあまり見ない。この句は暗雲とそこから洩れる光がさざ波で揺れていて少し異様。暗雲には不穏な気配が暗示されているようにも思える。農作業の実景を超えて、作者の捉える世界が確り見えてくる。

紺碧の山並せまる夏の夕 菅原 淑子

岩手県の山々。雪は疾うに解け群青の山膚が姿を現わ

す。この句では「紺碧」だ。日が暮れてきてその山並は作者の目に迫る。作者の一番好きな季節なのだろう。

囲ひたる路や覗くと樹林めき 杉淵真喜子

秋田路。同作に〈二メートルとは驚愕の秋田路〉がある。地元の路祭り用に路が葎簀で囲われていて、作者はそれを見にわざわざ出掛け、囲いの隙間から覗いた由。沢山の茎が長く伸びるにやら樹林のように見えた。作者にとつて秋田路は神聖なものであり郷土の誇り。「樹林めき」が発見。

雨の日や重さの欲しき夏布団 鈴木 智子

これまでの重たい布団から夏掛に変えたが、一寸早かつたようである。天気の良い日はいいが、雨でも降ろうものなら夜は少し肌寒くなる。夏布団の軽さが心許なく感じられた作者。「雨の日や」の「や」の切字の強さがそれを表している。「重さの欲しき」の実感に共鳴した。

大南風飛びしビニール踏み押さへ 鈴木 藤子

強い南風により飛んだビニール袋を、一瞬のうちに足で踏み押さえた作者。このビニール袋がこれからの人生にどれ程の価値を持つのかは知らないが、作者はそのようなことを考える前にかく動物的、反射的に踏んだ

のだ。動作が機敏。元気である。

縦書きは苦手みたらし団子食ふ 高橋 章子

縦と横を交叉させていて面白い。外国暮らしはすべてが横書き。スマホへ俳句やメッセージを書き込むような生活をしていると、この句のように「縦書きは苦手」ということになる。それは、作者の好きらしいみたらし団子を食べるときも同様である。串を縦にして食べたら危険であるし食べづらい。普通は横にして食べるものだ。そうすれば何本でも食べられる。「縦の物を横にもしない」ではなく、縦の物を横にして積極的に食べる、書く。新しい機智俳句。〈柏餅百個おつかひ間違へて〉にも注目。

春紫苑列なす路地や姫気分 高橋満利子

春紫苑。広辞苑では「大正時代に渡来。都会地周辺の雑草」とある。「都会地周辺の雑草」とは随分な言い様だが、四月頃から路地に列をなして咲く。そして、その白やピンクの春紫苑を見て、作者はお姫様気分になった。春紫苑は蕾がうつむいていることから「追想の愛」という花言葉を得ている。作者の姫気分にお似合いだ。

ペン立てに尖る鉛筆梅雨の雷 高橋美智子

「尖る」と「梅雨の雷」の言葉の競演。削られて尖つ

ている鉛筆がペン立てに立ち、そこへ雷が落ちてくる。実際に落雷することはないが、落ちてきそうな緊迫感がこの句にはある。梅雨の雷だから音は少しくぐもり、それが作者の心の奥にもやもやと深く沈んで響く。

あるだけの神輿繰り出せ疫病星 竹森 美喜

えやみ星と読む。新型コロナウイルス感染症が流行らなかつたら「えやみ」という言葉は甦ることはなかつたらう。さて、この句は疫病退散を神輿に託し「あるだけの神輿繰り出せ」と請い願っている。コロナ禍で、それまで全国各地で催されてきた伝統行事やイベントが一律中止となったが、パンデミックも一応の収束を見た今年も多くは多くの祭が復活した。東京でも神田祭、三社祭などが開催されたので、作者も威勢よく「神輿繰り出せ」と神輿の上から煽る。コロナの息の根を止めようと。

ドライアイス上に留まるしやぼん玉 田中 京

石鹼玉がドライアイスの上に来ると金縛りにあい動けなくなるという話を句会で伺った。ドライアイスの上空というか、ドライアイスに触れない距離のところ留まるのである。このあと石鹼玉がどうなるかは知らないが、ドライアイスが無くなるまで石鹼玉がその姿を維持できるとは思えない。金縛りを解くには溜息を吹きかけ

てやればいいのではと、科学実験苦手のぼくは思う。

新樹新風はちきれさうな友とある 寺田 幸子

新樹新風と「新」を重ねて新鮮。そしてその下に「ちきれさうな友」を続けてこの句は躍動感溢れる句となつた。その友と一緒に居るだけで作者も若返つた。

いたちぐさ咲くたび村は野に返る 長井 敦子

いたちぐさは連翹の花のこと。中国から平安時代頃に入つてきた。漢方では古来、腫れ物や虫毒などに効能があるといわれている。連翹の連なる垣根は明るく眩しく春を実感する。この句の村でもこの頃になると連翹が花の道と化する。下五の「野に返る」は村のかつての原風景を表現したものではないかと想像する。

噴水の穂は妖精の椅子かしら 中嶋きよし

噴水の頂に達する水を「噴水の穂」と感じ、その束があたかも可愛い妖精が座る椅子のようだと感じ取つた。その視点が新鮮である。下五の「かしら」は作者の童心の証。童心になりきつて妖精の登場を待っている。

夏つばめうつろなる眼を掠めけり 中村 敬子

虚ろな眼とは、魂が抜けたような表情のない眼。そこ

へ夏燕が掠めるように飛んできて、はっと我に返つた。虚ろな眼を狙つて燕が飛んで来たわけではなからうが、そのことでもかえつて作者は、眼の輝きの失せた自分の虚ろさを自覚した。夏燕の元気が際立つ一句である。

紫陽花や膨張し続ける宇宙 中村 東子

紫陽花の大きな毬からの発想なのだろう。その沢山のさまざまの色の紫陽花が溢れ出るように咲き誇る。額あじさいには花火という名を持つものもある。これも空へ弾ける趣がある。紫陽花色の星雲が幾つもある。それを天体望遠鏡で眺めるといふロマン。「や」が効果的。

ひとときを草餅かこみ若返り 中村 幹子

幾人もの中に作者も入つて憩うひととき。草餅を皆で作っているのだろうか、それとも各人が草餅を手にしているのだろうか。いずれにしても幼少の頃より馴染む草餅を懐かしみながら口にし、若返る。何とも貴重な時間を過ぎたものだ。

ふうはりと午睡の髪を風の訪ふ 野沢 慶子

開け放つた窓から、風がやさしく、昼寝どきの髪に触れる。浅い眠りであるので心地良くその風を戴く。「ふうはり」と「風の訪ふ」の表現に無理がなく、まだまだ

午睡を続けられそうな幸せの時間を担保している。

新樹光 藤井聡太の読む未来 橋本 恭子

将棋界の最年少のスター、藤井聡太。二十一歳にして多くの王座に輝き邁進する姿は日々報じられ、休憩時にとる昼食やお八つまでもが話題になる。十手先、百手先を読む将棋だが、藤井聡太はどこまでお見通しなのか。

「聡太の読む未来」は果てしないと、作者は詠む。上五「新樹光」が明るい未来を象徴している。

母の日やみそつかすの子はや七十 長谷川菊男

母の日を迎え、「みそつかす」だったかつての自分を振り返る。みそつかすは「味噌つ滓」。味噌を濾したかすであり、子ども達の間で一人前に扱われない子を使う。母の慈愛の庇護の下に育ち、早や七十歳。母への想いは今でも人一倍強い。その母へ捧げた感謝の一句。

ジムグリやちよつと小首を傾げしか 長谷部幸子

このジムグリは「地潜り」で、蛇の一種。鼠や土竜を食べるといふ。その蛇に遭遇した作者は驚きながらも、逃げずによく観察し「ちよつと小首を傾げしか」と詠んだ。親し気な表現に心の余裕と可笑しみを感じる。もしかしたら、ジムグリと昔馴染みであったのかも知れない。

あぢさゐや部屋に広がる空の色 浜田 優子

部屋の中に活けた紫陽花。華やかな色彩に思わず息をのむ。作者はその色を「空の色」と感じ、またその空の色が部屋全体に広がるような色と思った。部屋が解放され、小さな空間が大きな空間に変身。心の和む紫陽花の一句。

三社祭亡者も混じる渦の中 原田ミチ子

三社祭は浅草神社の祭礼。各町内会の神輿が練り歩き、神輿衆だけでなくそれを見守る観客も渦をなす。この句の亡者は、死んだ人や死んでなお成仏できずに冥途を彷徨っている魂をいうのだろう。見えないがその亡者も渦の中に混じっていると作者は詠む。関東大震災や先の大戦では隅田川に飛び込み多くの民が命を落とした。それも念頭に入れ詠まれていて、哀しさも少し。

海月にも夏の雲にもなれる日よ 春田 千歳

海に漂うくらげ。夏の空にぽっかり浮かぶ大きな雲。作者は変幻自在に、その日の気分や体調でいろいろに変身できる特別な才能を持っているらしい。というか、今のなまの体そのものが仮の姿なのかもしれない。これからのように変身するかを注意深く見守りたい。

春眠や夢のおのれはほぼ窮地 平野 豊雄

窮地に陥ることは過去にあつたし、今も将来も、生き
ている限りは安泰でいられることはない。作者は現実の
みならず、夢の中まで窮地に追い込まれるという人生を
送っているようだ。春眠なので気持ちの良い夢でも見そ
うな筈なのに「夢のおのれはほぼ窮地」というくらい強
迫的な夢を見てしまう。くれぐれもお大事に。

マチス展出で夏の陽の色変はる 平野 美子

20世紀を代表する芸術家、フランス画家のアンリ・マ
チス。南フランスの眩い陽光に魅了されたその鮮烈な色
彩表現は「色彩の魔術師」と謳われた。掲出の句は日本
でこのほど開催されたマチス展を観覧した作者の呟き。
「夏の陽の色変はる」は、マチスの絵にどれだけ魅せら
れたかを物語る表現であり、これはやはり絵の実作者ら
しい見方かと思われる。実際の色ではなく、感覚的な優
しい色彩を施した絵であろうから、陽の色も変つて見え
たのかもしれない。

時ならぬ鳥の Rond 竜天に 福井 芳野

「竜天に登る」は想像上の神聖な竜が春分の頃天に登
り、雲を起こして雨を降らし雷を落とすという古代中国
の伝説で、春の季語。単に「竜天に」とも。その竜を囀

しているのか、それとも見送っているのか、大空で鳥た
ちが円舞していると、作者は詠む。面白い構図の俳句で
ある。「時ならぬ」の緊迫感に味わいがある。

貝あれこれ握つてもらふ傘雨の忌 本多 遊子

傘雨忌は久保田万太郎の忌日。安住敦は「縹緲として
きはまりなく哀しい作品を残して、昭和三十八年五月六
日、突如この作家は世を去った」と『久保田万太郎全句
集』の解説で書く。突如として、赤貝のにぎりを喉に詰
まらせて亡くなつたのだ。万太郎と親しかった池田弥三
郎は「赤貝のおすしなどには、ふだん手をださなかつた
のだが」と赤貝を憎み、「お酒の飲みかたもせつかちで、
ちよこの酒をのどにめがけてほうりこむような飲み方を
していたが、きつと、赤貝のにぎりを、ほうりこむよう
にのみこんだ」のだろうとその死を悼んだ。掲出句の作
者もその万太郎の死のいきさつを知っていた筈で、貝に
特化した寿司のあれこれを握つてもらつたようである。
泉下の万太郎は「赤貝だけは食べるなよ」と言っている
かもしれない。でも、偲ぶには赤貝のにぎりを食べてみ
ることだ。

靴下を忘れ退院姫女苑 水谷 光子

ご家族がめでたく退院。入院中の諸々のものを片付け

さて家に戻って見たら、何か足りない。靴下が一足足りないことが判り直ぐに病院に戻って病室をよく見てみると、あった！こんなところにあった。高級な衣類ではなく、かなり古い靴下であるけれど、病人や家族には愛着のある一足。まだまだ使える。その往復の道端で見た姫女苑の美しかったことよと、作者は詠んだ。

すかんぼやむかしむかしの土手歩む 持田きよえ

今歩いている土手。すかんぼが何本も咲いていて作者の目に飛び込んできた。昔と変らない風景だ。歩いているうちに、すかんぼを見ているうちに、タイムスリップしてしまった作者。むかしむかしの土手を歩いている。中七の「むかしむかし」のリフレインが心地よく過去と現在を結んでいる。

切れ味よき空海の書よ夏つばめ 森尻 禮子

空海の書を「切れ味よき」と謳う。夏燕と取り合わせるのは、夏燕のその飛ぶ様も「切れ味よき」だからであろう。大空という一枚の紙を縦横無尽に飛ぶ燕の筆致が空海のそれに似ているのかは、私には解らない。でも、筆勢は双方相譲らないほどの鋭さを持っているのではないか。書を嗜まない私には眩しいばかりの一句である。

雑学鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第22回【愛甲石田のなまず】

神奈川県厚木市愛甲石田にある叔母（母の妹）の家に泊まりに行くのが夏休み恒例の楽しみだった。従弟（いとこ）は一歳年下だが、背も高く、運動神経もい。絵を描くのが得意で、当時、全国子ども絵画展で特選になったり、陸上大会でも地域のリレー代表選手に選ばれ、取柄のない私とは対照的だった。

早朝、家の前の用水に架かる小さな橋を渡って田圃の方へ駆け出す。朝霧のたちこめる稲のみどりや地平線まで広がる。白く動くもの。白鷺だ。小魚をくわえ、嘴を天にむける。畦にはレンゲ草が赤紫の遅い花を咲かせ、葉かげで蝗がじつとしている。葉のふちには夜露。霧が晴れてくると空から雲雀の声。遠くで牛が鳴いている。バケツで冷たい水を掬うと小魚が入った。

これから用水のカイボリをするのだ。雑草を引き抜き、束にして水の流れを止める。ねっとりしたヘドロが澄んだ水をにがらせる。体をくねらせ泳ぐものがある。「こっちにバケツ！」ヘドロもろとも畔道へバケツを振り上げた。そいつは長い髭と大きな口を動かした。見たこともない生き物だった。従弟が笑っている。